第七章　雜　件

第一節　北樺太油田ト第三國トノ關係

目　次

(一) 上海サカレン石腦油組合ノ關係……九〇五
(二) 英國會社ノ關係……九〇六
(三) 華府會議ト北樺太問題……九一三
(四) 米國シンクレア會社ノ關係……九一六

第七章　雜　件

第一節　北樺太油田ト第三國ノ關係

既ニ述ブルガ如ク帝國ガ北樺太油田、炭田ニ對スル國策遂行ニ當リ英米等第三國官民ニ干渉ノ餘地ヲ與ヘザルコトニ關シテハ常ニ愼重ノ考慮ヲ拂ヒ措置シ來レル處ナルガ今其ノ主ナルモノニ付略述スルコト左ノ如シ

(一) 上海サカレン石腦油組合ノ關係

舊ゾートフ鑛業權ニ付陳情（大十一年正）

我官民ガ北樺太事業ニ進出前同地ニ於ケルゾートフ大尉ノ企業ニ關シテハ既ニ述ベシ處ナルガ後大正十一年十月英人ビー、ヱム、デー、フリードリャンデルハ十一年十月突然亞港ノ我軍政部ニ出頭シ上海、サカレン石腦油工業組合代表者ロバートソンノ代理ナリトテ、オハ鑛區ニ對スル故ゾートフ大尉ノ鑛業權ヲ主張陳情セリ

依テ軍ニ於テハ右ハ鑛區稅滯納ノタメ露國時代ニ於テ既ニ官沒セラレ又曩ニ我軍ノ發布セル鑛業取締令ニ依ル屆出モナカリシモノナルガ故ニ受理シガタシトテ却下セリ然ルニ同年十二月同人ハ上海ヨリ再ビ請願書ヲ提出シ來レルモ軍政部ハ前回同樣之ヲ却下セリ

（終）

(二) 英國會社トノ關係

一九一〇年（明治四十二年）倫敦ニ於テ**セコントサカレンシンヂケート**設立セラレ**サカレン**石油、石炭會社（後露國極東工業會社ト改稱）ノ油田權利ノ半分ヲ取得シ更ニ一九一二年（大正元年）倫敦ニ於テ**サカレンオイルフィルド**會社、設立右**セコンドサカレンシンヂケート**ノ鑛區五十ヲ讓受ケ試掘ニ着手セシガ之等ノ權利ハ一九一八年期限滿了ニ至レルコト既ニ第一章ニ述ベタル處ノ如シ

而シテ此ノ**セコンドサカレンシンヂケート**及**サカレンオイルフィルド**會社ハ其後モ倫敦ニ於テ存續シ一九二〇年（大正九年）英國版**オイルアンドペトロシュムマニュアル**ニ依レバ左ノ如シ

○セコントサカレンシンヂケートリミッテット（一九一〇年一月登記）

役員

社長	**サー、エッチ、ホワイト**	（英人）
取締役	**ビー、ヴイ、ビスコウプスキー**	（露人）
同	**イー、エス、ブリッグス**	（英人）
同	**エス、デー、デリサル**	（露人）

同	博士 **ピー、ドウオルコウイツ**	（露人英國ニ歸化ス）
同	**シー、ヴイ、フローベン**	
同	**ジエートム**	（英人）
書記	**エフ、エフ、ブリッグス**	

○サカレン、オイルフィルド會社（一九一二年八月登記）

役員

社長代理	**ダブルー、デーエルスナー**	
取締役	將軍 **ビーヴイ、ビスコーブスキー**	（露人）
同	**イー、エス、ブリッグス**	（英人）
同	男爵 **エフ、シヤザール**	（白耳義人）
同	**エフ、デ、デリサール**	（露人）
	イー、チー、ジュリッツ	
顧問技師博士	**ヒードウオルコウイツ**	

英國會社我三井、三菱ニ對シ北樺太鑛業權ヲ賣込マントス（大正十、十一年）

大正十年右**サカレンオイルフィルド**會社重役ニシテ大株主ナル**シヤザール**男爵（Chazal）ハ倫敦ニ於テ我三菱支店ニ對シ右會社ノ株式賣込ヲ申デ之ニヨリ三菱ガ右會社ノ實權ヲ掌握スルニ至ランコトヲ勸誘セリ又翌大正十一年八月**セコンドサカリンシンヂケート**モ倫敦三井支店ニ對シ其ノ北樺太石油鑛區ヲ讓渡セントスルノ申込ヲ爲セシガ三菱、三井兩本社共右英國會社ノ鑛業權ハ既ニ消滅セルモノニシテ關與ノ價値ナカルベシトスル海軍ノ意見ニ依リ商談ニ入ラズシテ止ミタリ（**シヤザール**男爵ハ此後大正十三年ニモ我安達白耳義大使ニ對シ株式讓渡ノ事情ニ付申出タリ）蓋シ之等英系會社ノ奔走ハ露國革命ニ次ギ我軍事占領等ノ情勢ニ顧ミ會社ノ將來ニ不安ヲ感ズルニ至レル結果ト見ルベク大正九年十二月**サカレンオイルフィルド**會社ノ發行セル報告ハ以テ其一端ヲ窺フニ足ルベシ

一九二〇年九月三十日迄ノ期間ニ於ケル報告ハ左ノ通ナリ

最近ノ定時總會後取締役ハ**サカレン**ノ政治的地位如何ヲ探究スルタメ種々ノ調査ヲナセリ當時**サカレン**ノ狀況ハ海軍大將**コルチヤック**政府時代ニ比シ非常ノ變化ヲ來セリ取締役ハ露國側ノ支配人露國法定代理人ヨリノ報告ノ中絶ニ依リ非常ナル不利ノ地位ニ置カレ又**ドミドリグリゴリエフ**氏ハ彼ノ委任權ヲ放棄シ西比利亞ハ無政府狀態ニシテ會社ノ利益增進ニ付何等策ノ施シ樣モナキ旨報告セリ

英國外務省ハ日本ガ**ニコラエフスク**ニ於ケル日本人慘殺ニ對シ將來適當ナル賠償ヲ得ル爲ニ**サカレン**北部ヲ一時占領セルコトノ通知ヲ受ケタリ

取締役ハ日本人ノ某組合ガ帝政時代ノ鑛業權ハ消滅セルモノトシテ石油石炭ノ試掘ニ從事シツツアル事ヲ知ルモ若シ是ガ事實ナリトセバ此組合ガ已ニ適當ナル場所ヲ撰定シ直ニ代表者ガ**サカレン**ニアル政府ノ樹立ヲ得テ彼等ノ鑛區ヲ再ビ登記スルコトヲ得バ甚ダ結構ナル次第ナリ之ヲ遂行スルニハ新資本ヲ要スベク取締役ハ該事件ニ付考慮スルタメニ近キ將來ニ於テ大會ヲ開ク計畫ヲナシオレリ

（下略）

尙英國外務省ハ大正九年十一月右會社ノ照會ニ對シ其ノ利權保護ニ關シ

「日本政府ノ**サカレン**島竝ニ**サカレン**州ニ屬スル大陸ノ一部ノ占領ハ永久的ノモノニアラズシテ只尼港ニ於ケル日本人慘殺ニ對シ將來適當ナル賠償ヲ得ルタメノ保證ナルコト尙貴方ニテ日本ノ占領中過去ニ於テ得タル權利ヲ確保スルノ必要アルニ於テハ帝國政府ノ政治上ノ保

英國會社ト露人グリゴリエフ

護ヲ與フベシ」トノ旨ノ回答ヲナセリト云フ

（註）右ノグリゴリエフハ舊「サカレン州」知事ニシテ極東工業會社時代ヨリ不等英國會社ト關係奔走セルモノニシテ大正九年四月、我軍ガ亞港ニ上陸セル際同人モ同地ニ至リ運動シ我海軍ノタメニ排斥セラレタルモノニシテ其ノ前後ノ行動及英國會社トノ關係等ニ付テハ第三章ニ記述セル處ナリ

英國會社ト米國スタンダード會社ノ關係（大正十二年）

其後右英國會社ハ米國スタンダード會社ニモ提携又ハ讓渡ニ付商談セルモノノ如ク大正十二年三月スタンダード石油會社重役ニシテ桑港日本協會々長タルエブ、ビールーミスハ埴原駐米大使ヲ訪ヒ同社ハ豫テ北樺太及支那方面ノ石油事業ニ着手シタキ希望ヲ有シ居ルニ付差當リ北樺太ニ於テ日本人トノ協同企業可能ナリトセバ同社ハ喜デ之ニ應ズベク同社ニ於テハ資本及優秀ノ經驗ト設備トヲ此方面ニ向ケ得ル見込ニ付同社ノ此ノ意向丈ケハ日本政府其他然ルベキ筋ニ傳ヘラレタキ旨申出アリ

次デ同年五月、同人ハ再度埴原大使ヲ訪ヒ英國某會社ヨリ其ノ北樺太ニ有スル利權ニ關シ買收又ハ共同經營ノ商談進行中ニシテ話ヲ進ムルニ先チ實地踏査ノタメ專門技師四、五名ヲ派遣シ度希望ヲ述ベ又彼地ニ作業スル上ニ於テハ日本ノ權利ヲ侵害スルノ意志ハ毫モ存スルコトナク英國會社ト交渉ヲ進ムルニ先チテ先ヅ日本政府ニ了解ヲ求メタル次第ナル旨ヲ併テ申述タリ之ニ引續キ翌六月、東京駐劄英國代理大使ハ我外務省ニ對シセコントサカレン、シンヂケート及サカレンオイルフィールド會社ガ北樺太ニ於ケル其鑛區機械等ノ狀況調査ノタメ人員ヲ派遣スルノ件ニ付一應帝國政府ノ意向ヲ確メ來レリ蓋シ之等英、米側ノ申出ハ相關連セル同一ノ問題ニシテ益々事態ヲ複雜ナラシムルノ慮アリ乃チ之ガ處置ニ關シ政府ハ左ノ通方針ヲ定メ且ツ在本邦英國臨時代理大使ニ回答スル處アリタリ

スタンダード會社現地踏査ヲ希望ス（大正十二年）

英國會社ハ外交機關ヲ通ジ現地調査ニ付申出（大正十二年）

英、米會社ヨリ北樺太實査申出ニ對スル措置ノ方針（大正十二年六月）

大正十二年六月十六日閣議

曩ニ桑港日本協會々長ルーミスハ在米埴原大使ニ對シ其關係ヲ有スルスタンダード、オイル、コンバニー、オブカリフォルニアガ某米國會社ヨリ其所有ニ係ル北樺太石油コンセッションニ付共同經營又ハ讓渡ニ關スル商談ヲ受ケタルニ依リ先ヅ實地踏査ノ爲調査員派遣ヲ希望スル旨申出タル趣ヲ以テ之ニ對スル回答振ニ付同大使ヨリ請訓シ來リタルガ今般在本邦英國代理大使ハ北樺太油田炭田開發ノ權利ヲ有スル英國會社（セコンド、サガレン、シンヂケート及サカレ

ント**オイルフィルト**會社）ヨリ六月初北樺太ニ調査員ヲ派遣シタキ處右ニ對スル便宜供與方ニ關スル帝國政府ノ意向承知シタキ旨申出デタリ然ルニ占領當時派遣軍ニ於テ北樺太鑛務署記錄ニ付調査シタル所ニ依レバ前記諸會社關係ノ權利ハ消滅セルコトニナリ居ルニ顧ミ右ノ如キ申出ニ應ジ實地調査ヲ行ハシムルハ好マシカラザルヲ以テ右**スタンダード**會社竝英國會社調査員派遣計畫ニ對シテハ之ヲ思止マラシムル樣措置スルコト可　然モ右ノ方法ヲ盡スニ拘ラズ先方ガ飽ク迄調査員派遣ヲ希望スル場合ニ直ニ之ヲ拒絶スルコトハ占領地鑛業問題ニ對スル我方態度ニ關シ多大ノ疑念ヲ起サシメ延テ北樺太問題ノ解決ニ關シ我ニ不利ナル形勢ヲ誘致スルノ虞アルニ付其場合ニハ先方ニ對シ我方占領實施前正當ニ獲得セラレタル權利ヲ尊重スベキハ勿論ナルモ北樺太派遣軍ガ占領當時引繼タル鑛務署ノ鑛務記錄ニ依レバ先方申出ノ如キ權利ハ存在セザルニ付右英米ノ申出ニ對シテハ先ヅ如何ナル權利ニ基キ如何ナル地域ニ就キ如何ナル方法ヲ以テ調査ヲ行ハントスルモノナルヤヲ承知スルノ要アル旨ヲ說示シ右ニ對スル書類ノ提ヲ求メタル上篤ト我方ニ於テ調査ヲ加ヘタル上其許否ヲ決スル事ト致度

（終）

右閣議方針ニ基キ英國大使ニ回答（大正十二年六月）

內田外務大臣ヨリ在本邦英國臨時代理大使ヘ回答

（大正十二年六月十九日）

歐一機密第七六號

以書翰啓上致候陳者本月六日附貴翰第六十五號ヲ以テ露國帝政政府ヨリ許與セラレタル北樺太油田炭田開發ノ利權ヲ保有スル英國會社**セコンドサガリンシンヂケート**及**サガリンオイルフィールドリミテッド**ヨリ六月初旬北樺太ニ調査員ヲ派遣シタキ處右ニ對スル便宜供與方ニ關スル帝國政府ノ意嚮承知シタキ旨御申越相成敬承致候帝國政府ハ北樺太占領實施前同地ニ於テ露國帝政政府及露國臨時政府ヨリ正當ニ獲得シ且占領當時有效ニ存續セル權利ヲ尊重スルコト勿論ナル次第ニ有之候處薩哈璉州派遣軍ガ北樺太占領當時引繼ギタル同地露國鑛務署ノ記錄ニ就キ調査シタル處ニ依レバ御申越ノ如キ英國會社關係ノ權利ハ見當ラズ從テ該英國會社ノ調査員派遣ニ關シテハ豫メ其如何ナル權利ニ基クモノナルヤヲ承知致度ノミナラズ目下北樺太ハ帝國派遣軍ニ於テ軍政ヲ布キ居レル關係上調査員ノ調査ノ地域方法等ニ付テモ豫メ之ヲ承知致置クノ必要有之候間調査員派遣ニ先チ該英國會社ノ權利ノ存在ヲ證明スルニ足ルベキ明確ナル資料調査ヲ行ハントスル地域及調査ノ方法ニ關スル書類ノ提示ヲ得ムコトヲ希望致候右回答申進旁本

大臣ハ茲ニ重テ貴下ニ向テ敬意ヲ表シ候

敬具

右ニ對シ同年九月英國大使ハ右英國會社ノ鑛業權ヲ說明スベキ詳細ノ文書及圖面ヲ送付シ來リシヲ以テ更ニ之ニ基キ我派遣軍軍政部ヲシテ露國鑛務署時代ノ帳簿ト照合調査セシムルコトトセリ

爾後我外務省ハ右調査資料ニ關シ再三英國側ト應答シ日時ヲ經過セシガ軍政部調査ニ依リ右英國會社ノ權利ナルモノハ何レモ一九一八年（大正七年）迄ニ滿期其其ノ他ノ事由ニ依リ消滅セルコト明カナルガ故ニ大正十三年九月、幣原外務大臣ハ左ノ通リ圓曲ニ之ヲ拒絕セリ

英國會社ノ調査隊派遣ヲ拒絕ス（大正十三年九月）

英國會社ノ北樺太油田炭田調査員派遣方ニ關スル件

（大正十三年九月八日幣原外務大臣ヨリ在本邦英國大使宛）

以書翰致啓上候陳者**セコンド**、**サガレン**、**シンチケート**、**リミッテッド**及**サガレン**、**オイルフイールド**、**リミッテッド**ヨリ北樺太ヘ調査員派遣方ニ關聯シ本年七月四日附貴翰第八四號ヲ以テ御申越ノ趣敬承致候帝國政府ハ御來示ノ趣旨ニ對シ篤ト審議相加ヘ候處目下ノ情況ニ於テ右會社技師ノ北樺太內旅行ハ忽チ當國ノ輿論ヲ刺激シ種々物議ノ原因トナルヲ免レズト認メラレ

候ニ付遺憾ナガラ之ヲ許可スルニ便ナラザル次第ニ有之此ノ決定ノ已ムヲ得ザル事情ハ十分貴國政府ノ御諒解ヲ得ベキコトヽ確信致候尤モ右兩會社ニ屬スル機械器具等ニシテ北樺太ニ存在スルモノアラバ兩會社ヨリ其ノ品名及所在ヲ申告次第帝國占領軍官憲ニ於テ及ブ限リ調査方可取計候

本件ニ關聯シテ附言スベキ日本軍ノ北樺太占領當時露國側ヨリ引繼ギタル鑛業記錄ニ徵スルニ御來示ノ兩會社關係ノ鑛業權ハ全部千九百十八年十月十三日迄ノ間ニ於テ許可期限滿了セルモノナル趣ニ有之候

右回答申進旁々本大臣ハ茲ニ重ネテ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候

敬具

尙當時本件ニ關スル幣原外務大臣ト英國大使トノ會談ニ付同年十月同大使ノ提出セル口上書左ノ如シ

（註）本問題ニ付當時派遣軍、軍政部調査ニ關シテハ大正十三年一月薩哈嗹第二號、大正十三年八月、薩司謀第二八七號參照

英國會社ノ來歷、投資等ニ關シ英大使口上書（大正十三年十月）

口上書（譯文）

（大正十三年十月二十三日　英國大使館）

在東京英國大使ハ過般日本外務大臣閣下トノ會談中閣下ノ提起セラレタル英國會社ノ薩哈嗹ニ於ケル開發權回復ニ對スル請求問題ニ關スル質問ニ關シ同地方ニ於テ石油利權ヲ有スルト云フ英國會社ハ**サハレン**、**オイルフィールド**、**リミッテッド**及**セコンド**、**サハレン**、**シンヂケート**、**リミテッド**ナルコトヲ申述ブルノ光榮ヲ有ス

此兩會社ハ相互關係ヲ有ス千九百十二年前者ハ後者ノ有スル二百四鑛區中ヨリ五十鑛區ヲ取得シタリ**セコンド**、**サハレン**、**シンヂケート**ハ最初露西亞**サハレン**會社ヨリ利權ヲ得千九百十二年迄ニ既ニ利權ノ獲得並地質調査、試掘、租稅等ノ爲ニ約三萬磅ヲ費セリ　**サハレン**、**オイルフィールド**、**リミッテッド**ハ右利權ノ一部ヲ得ルト同時ニ試掘隊ヲ派遣シタルガ同隊ハ大戰勃發迄**サハレン**島ニ留リ油井ノ掘鑿其他ノ方法ニ依リ會社ノ鑛區（殊ニ第四百七十九號鑛區）ヲ開發セリ千九百十四年八月直前更ニ派遣隊ヲ送ルノ準備整ヒシガ大戰勃發ノ爲右準備ハ徒勞ニ歸シタルノミナラズ最初ニ派遣シタル調査隊ノ歸還ヲモ必要トスルニ至レリ機械及器具ハ**ボアテイセン**（薩哈嗹）ニ於テ該地方警察ニ委託シ置ケルガ恐ラク壞損シタルナルベシ此時迄ニ財

日露交渉成立後ニ於ケル英國トノ應答（大正十四年）

產開發ノ爲ニ更ニ三萬二千磅ヲ費セリ從テ出費ハ計六萬二千磅ヲ算ス千九百十三年及更ニ千九百十六年ニ於テ利權ハ露國政府ニヨリ延期セラレタリ

休戰以來兩會社ハ數回薩哈嗹島ニ於ケル事件ノ地位ヲ確メムト試ミ又**ソヴィエト**代表機關ノ倫敦ニ設置セラルルヤ同團體ト交渉ヲ開始セリ　然レドモ何等滿足ナル保障ヲ得ルコト能ハザリキ千九百二十二年、勞農政府ガ米國**シンクレア**會社ニ附與シタル利權ハ**サハレン**、**オイルフィールド**、**リミッテッド**及**セコンド**、**サハレン**、**シンヂケート**兩會社ノ利權ヲ包含ス

其後大正十四年二月北京ニ於テ日露交渉成立シ兩國間ニ北樺太利權ノ處分決スルヤ右ハ前記英國會社ノ權利ト抵觸スル旨ヲ以テ英國側ヨリ再ビ問題ヲ提起スルニ至リシガ之ニ對シ幣原外務大臣回答ノ要旨次ノ如シ

大正十四年三月幣原外務大臣ヨリ在本邦英國大使ヘ回答（摘要）

英國政府ノ所見ニ依レバ日露協約議定書乙ニ掲ゲラレタル油田區域中ニハ英國臣民ノ前露國政府ヨリ特許セラレタル借區ヲ包含スル趣ノ處前信ニ開陳セル通リ日本官憲ノ一應調査シ得タル限リ本件英國臣民ノ主張セル權利ハ既ニ消滅ニ歸シタルモノト認メラルルノミナラズ曩ニ北京

ニ於ケル日露協約協商ノ際**ソビエット**政府代表者ハ所定ノ油田ニ對シ何等ノ權利ヲ有スル第三者ノ全然存在セザルコトヲ確言シタル次第ニ有之候　何レニスルモ北樺太ノ油田ニ關シ英國臣民ノ前露國政府ヨリ許與セラレタル油田ノ利權ガ今尚有效ニ存續スルヤノ問題ハ其利權許與ノ條件及油田所在國ノ法令ニ依リ決セラルベキモノナリ

帝國政府ハ自己ノ關與セザル利權許與ノ條件外國法令ノ解譯ノ適用ニ付キ徹底的ニ審査ヲ遂グルノ主意ニアラズ從テ右英國臣民ノ主張セル權利ノ效力問題ハ彼我兩國政府間ニ於ケル論議ノ題目タルニ適セザルモノト思考セラル

（下略）

大正十五年北樺太石油會社成立後モ**シヤザル**男爵ハ本問題ニ關シ屢々我安達駐白大使ニ申出ヅル處アリ

又同年七、八月ノ頃倫敦ニ於テ**サカレンオイルフィルド**及**セコンドサカレンシンヂケート**ニ關係アル S.G.Feodlossief（露國帝政時代ニ閣員タリシコトアリト云フ）ナルモノ我大使館ニ對シ其ノ舊權利ノ補償ニ關シ申出シガ何レモ取合ハレズシテ止シタリ

サカレンオイルフィルド會社總會ニ於ケル社長報告（大正十五年一月）

（參照）

大正十五年一月**サカレンオイルフィルド**會社ノ定時總會ニ於ケル同社長**フレンチ**卿ノ報告ハ該會社ト北樺太事業トノ關係ヲ知ルニ便ナルヲ以テ聊カ重複ノ嫌アルモ參考ノタメ左ニ之ヲ摘要ス

（前略）顧ルニ**サカレス**油田會社ハ一九一二年公認資本金三十五萬**ポンド**トシテ英國ニ於テ登記ヲ了シ其内二十五萬一千七百二十**ポンド**ニ相當スル株式發行セラレタリ當社ノ目的ハ**サカレン**島ニ於ケル**セコンドサカレンシンヂケート**所有ノ五十個ノ石油鑛區ヲ獲得シ之ヲ作業スルニアリ

（中略）

當社ノ鑛區ハ最初ノ試掘ノ一井ニ於テ既ニ油層ヲ掘リ當テタリ時恰モ歐洲大戰勃發シ、タメニ當社ハ爾後ノ活動ヲ可能ナラシムル從業員及掘鑿器具ヲ送付シ得ザルノ已ムナキニ至レリ

（中略）

戰爭ノ終了ト共ニ革命ハ事實上完成シ新ニ**ソビエト**政府ハ當社ノ從業員ノ上陸ヲ許可セズ且ツ當社ノ權利ノ容認ヲ拒絶セリ

斯クシテ日本軍ハ**サカレン**島ヲ占領シ日本ノ當業者ハ當社ノ機具ヲ用ヒ當社ノ鑛區ヲ作業シ

始メタリ

（中略）

日本政府ニ對スル當社ノ意志表示ハ一九二〇年以來爲サレタリシモ日本側ハアラユル遷延ト遁辭ノ手段ニ依リテ問題ノ論點ニ及ブコトヲ回避セルハ明白ナリ

（中略）

一九二三年五月當社ハ我外務省（編註、英國外務省ノコトナリ）ニ對シ當社ノ代表者ヲ**サカレン**島ニ派遣シテ彼地ニ存セル當社ノ財產ヲ檢査スル件ニ關シ日本政府ヘ許可申請ノ交渉方ヲ請願セリ之ニ對シ日本側ノ回答ハ英國二會社（當社及**セコンドサカレンシンヂケート**）ニ付テハ該地方ノ露國鑛山官署ノ帳簿ニ於テハ何等ノ記錄ヲモ認メ得ザレドモ日本政府ハ「原則トシテ前帝政露國政府及日本軍占領以前露政府ヨリ合法的ニ許可ヲ受ケタル利權ハ之レヲ尊重ス」云々ト曰ヒ尙ホ其他ノ報道ヲ提供サレタキ旨ヲ附加シ來レリ

（中略）

一九二四年五月當社ハ我外務省ニ向ヒ從來ノ經緯ヲ要約シ日本政府ヘ要請方ヲ出願セリ

我外務省ノ當社ニ對スル回答左ノ如シ

「露國政府ノ記錄ニ依リテ見ルニ貴社ノ鑛業權許可ハ一九一八年十月十三日ヲ以テ期限滿了シタル旨ヲ日本政府ハ回答シ來レリ

（中略）

當社ハ日本政府ガ明白ニ惡意ヲ以テ行動シ居ルコトヲ指摘シ我帝國政府ハ更ニ强硬ナル態度ヲ執ランコトヲ提言セリ

斯カル裡ニ日本ハ**サカレン**島ヲ露國ニ還附シ**ソビエト**聯邦ハ**サカレン**油田會社及**セコンドサカレンシンヂケート**所有ノ鑛區ノ全部ニ涉レル地域ノ石油利權ヲ一九二四年十月二十九日、日本政府ニ許與セリ爾後會社ハ我外務省ヲ經由シテ數回ノ問合セヲナシタルニ不拘日本政府ヨリハ何等滿足スベキ回答ニ接セズ日本政府ハ明カニ盜難財產ノ轉得者ノ地位ニ在ルモノニシテ現在露國ニ於ケルガ如キ政府ニ對シテハ泰西諸國ノ國際法ノ思想及通常ノ誠實ナル義務觀念ヲ期待シ得ザルト同樣日本ガ前述ノ德義的精神ヲ以テ友邦ニ對スルコトヲ期待スルハ恐ラク不可能ナルベシ

最後ニ取締役ハ凡テ會社ノ地位ヲ回復セシムベクアラユル努力ヲ今後モ繼續スベシ　（終）

(三) 華府會議ト北樺太問題

大正十年十一月華府會議（軍備制限並ニ之ニ關聯シテ太平洋及極東問題ヲモ討議スルヲ目的トス）開催セラルヽヤ我國ハ此會議ニ於テ薩哈嗹占領問題ノ討議ヲ拒否スルノ方針ナリシモ若シ會議ノ情勢如何ニ依リ要スル場合ニハ同地施政ノ狀況ニ關シ如何ナル程度ノ說明ヲナスベキヤ等ニ付外務、陸海、軍當局ニ於テ研究スル處アリタリ　大正十一年一月下旬華府ニ於テ極東委員會ニ於ケル西比利亞問題ノ討議ニ當リ我幣原全權ハ帝國ガ初メチェッコスローバキヤ軍隊援助ノタメ米國ト共ニシベリアニ出兵以來ノ經過ト我國ガ今日シベリアノ實情ニ鑑ミ尙相當兵力ヲ駐ムルヲ要スル特別ノ事情ヲ說明シ更ニ薩哈嗹州軍事占領問題ニ付本件ハ尼港事件ノ結果トシテ執リタル一時的ノ處置ニシテ確實ナル露國政府成立シ同事件ガ滿足ニ落着次第終了セラルベキモノナリトシ最後ニ露國領土ノ保全、內政不干涉及露領ノ到ル處ニ於テ商工業ノ機會均等ハ日本既定ノ政策ナル旨ノ陳述ヲナセリ

而シテ米國ヒューズ全權ハ右幣原全權ノ陳述ニ對シ大要左ノ陳述ヲナセリ

大正十一年一月華府會議ニ於ケルヒューズ米國全權ノ陳述（摘要）

幣原全權聲明（大正十一年一月）

米國代表ハ幣原男爵ノ陳述ヲ聽取シ且シベリア、沿海州及サハレン州ヨリ日本軍ヲ撤退セシムルコトヲ保證セル日本政府ノ覺書ヲ其代表者幣原男爵ヨリ受理セリ　米國代表ハ又日本ガ露國ノ領土的保全ヲ尊重シ露國ノ內政ニ對スル非干涉主義竝ニ露領ノ到ル處ニ於テ各國民ノ工業及商業ニ對シ機會均等ノ原則ヲ遵守スルハ日本ノ既定政策ナリトノ保證ヲ日本代表ヨリ得タリ是等ノ保證ハ日本ガシベリアニ於テ其軍事的行動ニ依リ露國民ノ權利ヲ絕對ニ侵害セズ或ハ絕對ニ不公平ナル商業的利便ヲ獲得セズ又シベリアノ漁業區ヲ獨占セズ且ツサハレン沿海州等ノ資源ヲ獨占的ニ開發セントスルモノニ非ルコトヲ意味スルモノト思惟ス」云々尙日本ノサハレン占領ハ日本ノ主張スルガ如ク日米共同出兵ノ延長ニアラズシテ偶發的事故ナリ又日米共同出兵ノ精神ハ偶發的事故ヲ口實トシテ一時的ニモセヨ露國ノ領土ヲ占領シ或ハシベリア人民ニ軍政或ハ民政ヲ施サズトノ約束ヲ露國民ニ與ヘントシタルナリ」ト述ベ最後ニ「米國代表ハ日本代表ガ茲ニ聲明セルシベリア撤兵ノ意志ヲ近キ將來ニ於テ實行シ且ツサハレンヲ露國民ニ還附センコトヲ重テ希望スルモ亦以テ最モ友誼的ナル精神ニ出ヅルモノニ外ナラズ」

ト結ビタリ

米國全權ヒューズノ陳述（大正十一年一月）

日露條約後米國ノ言論

更ニ佛國全權**サロー**氏モ陳述スル處アリシガ同年二月四日第六會總會ニ於テ右太平洋極東委員會ニ於ケル日、米、佛、全權ノ陳述ハ議長**ヒューズ**氏ニ依リ紹介セラレ之ヲ本會議ノ記錄ニ殘スコトヲ可決スルニ至レリ

（華府會議總會議事錄）

後大正十四年三月、日露條約成立ニ依リ我利權ニ關スル基礎確定スルヤ米國言論界ニ於テハ右日露條約ヲ以テ門戸開放主義ヲ空文ニ終ラシムルモノニシテ華府會議ニ於ケル幣原全權ノ聲明ニ反スト批難スルモノアリ松平駐米大使ハ之等ニ對シ我利權ハ何等獨占的ノモノニアラズ一定地域ノ油田ヲ合意ニ依リ獲得セントスルモノ故普通ノ利權契約ニ異ラズ而シテ右小地域以外ノ分ニ對シテハ何國人タルヲ問ハズ露國ト自由ニ協定シ得ルモノナレバ該聲明ニ反セズト說明セリ一方米人間ニ於テモ「右日本ノ得タル地積ハ樺太ノ小部分ニシテ毫モ門戸開放主義ニ抵觸セズトスル議論モ多ク松平大使ハ本問題ニ付テハ或ハ**シンクレア**ノ關係ニ於テ今後多少論議惹起スルコトアリトスルモ問題ノ紛糾ヲ來ス如キコトハナカルベキ旨ヲ報告セリ次デ同大使ハ四月十三日付ヲ以テ更ニ左ノ通幣原外務大臣ニ情報スル處アリタリ

大正十四年四月、松平駐米大使ヨリ幣原外務大臣ヘ報告

新聞報

本月十日、定例會見日ニ於テ大統領ハ記者通信員ニ對シ米國當局ハ日本ノ油田利權獲得ヲ以テ何等門戸開放ニ反スルモノニアラズト認メ居レリ從テ今後之ニ反對ノ虛報ヲ傳フルモノアルニ於テハ必要ニ應ジ政府ノ見解ヲ公表スベシト述ベ又國務長官ハ本件ニ關シテハ**シンクレア**會社ノ顧問タル**ランシング**及**ウールジー**（**ランシング**國務卿時代ノ**ソリシター**）九日事務所ヨリ國務省ニ對シ日本ノ得タル利權ノ性質並目的「シ社」ノ得タル油田利權ノ優越權等ニ就キ意見書ヲ提出シタル旨語リ猶日本ノ油田利權取得ヲ批難スルモノアルモ米當局ハ關係日露協約正文ニ就キ考究シタル結果日本ハ毫モ其聲明ヲ裏切ルモノニアラズト認ムト述ベタル趣各新聞ニ報道サル更ニ紐育**ウォールド**ハ**フォックス**ノ所說ニ反シ**ボラー**スラ日露協約ハ何等門戸開放ニ關スル日本ノ聲明ニ反スルモノニアラズト言明セリト傳ヘ居レルガ紐育**タイムス**初メ有力ナル新聞ハ日本ノ態度ヲ批難セルハ門戸開放主義ノ維持及米會社ノ利權擁護ノ美名ノ下ニ米當局ヲ動カシ速カニ露國ヲ承認セシメントノ運動ニ起因スルモノナリト報ズ」斯ノ如クシテ本件ニ關スル米國ノ言論モ格別ノ反響ナク終熄セリ

（終）

シ社ト鈴木商店ト提携ヲ議ス（大正十年）

(四) 米國シンクレア會社ト北樺太油田

千九百二十一年（大正十年）四月頃シンクレア、コンソリデーデットオイル、コオポレーションノ副社長ワッツ紐育駐在、西商務官ヲ訪問シ日米共同資本ヲ以テ約二千萬弗位ノ石油會社ヲ組織シ差當リ同會社所有ノ石油ヲ東洋諸國ニ供給販賣シ同時ニ樺太、西比利亜、支那方面ノ油田ヲ開發シ單純ナル營利本位ノ下ニ利益ヲ分配スルモノトシ株式ノ持分ハ日米半々ニテ若シ油田開發ヲ目的トスル場合ニハ日本側ニ於テハ利權ヲ以テ出資ニ交フルヲ妨ゲズ要スルニ米國側ハ差當リ一千萬弗ノ資金ヲ提供シテ前記ノ事業ニ着手シ將來事業ノ進行ニ伴ヒ猶多數ノ出資ヲ辭セズ此ノ條件ノ下ニ若シ日本ニテ誠意ヲ以テ相談ニ應ズルモノアラバ直ニ人ヲ派シテ協議スベシ其ノ相手方ノ選定斡旋ヲ乞フト申入レタリ

右ニ依テ西商務官ハ鈴木商店ヲ紹介シタルモノヽ如ク同商店紐育支店長柏（萬太郎）ハ本店ノ指令ニ基キ西商務官迄シンクレアニ對シ仲介ヲ依頼シタリシモ同年（大正十年）六月三日内田外務大臣ハシンクレアノ東洋侵入ハ從來極東方面ニ雄飛セルスタンダード及ローヤルダッチノ勢力ヲ殺グニ至ルコトナクシテ却テ石油界ヲ紛糾セシメ我邦人石油業者ヲ壓迫スルニ止ラズ北樺太ハ目下我軍ノ占領ニ屬シ新權利ノ取得ヲ禁ジ居ルコト又同地ノ鑛業權ニ關シ外國人ト關係

鈴木商店シ社トノ交渉ヲ止ム

ヲ結ブハ面白カラザルヲ以テ此際話ヲ進メザルヲ可トストノ意味ノ訓令ヲ電送セリ

然レドモ柏ハ本問題ノ重要ノ意義アルヲ知リシ社ト協力ノ希望ニテ交渉ヲ進メシニ同年（大正十年）七月末ニ至リシ社ヨリ西商務官及鈴木ノ代表者柏ニ對シ突然同社ト極東共和國トノ間ニ北樺太ニ於ケル油田ノ利權獲得ニ關スル契約成立シタルコトヲ告ゲ油田ノ開發ニハ是非共日米兩國ノ協力ニ依ラザルベカラザルガ故ニ日米合資ノ樺太石油開拓會社ヲ組織スルノ急務ナルヲ説キ其出資ノ割合ニ就キテハ曩ノ提言ヲ飜シテ日本側ハ三割五分ノ權利ヲ得ルタメ千二百萬弗ヲ支出スルコト但シ日本支出額ニ對シテハ利益ノ二割五分ヲ割キテ逐次償還スベク之ニ反シ會社ハ極東政府ニ鑛區稅ヲ支拂ハザルベカラザルコトヲ理由トシテ六割五分ヲ保持スルコトトシ尚石油採掘ノ曉ニ於テ石油ノ販賣等ニ就テハ別ニ補助會社ヲ設立スベク其方ノ出資ニ就テハ日本側ニ多クノ割前ヲ提供スルモ差支ナシトナシ要スルニ北樺太ニ於ケル石油ノ利權ハ全部完全ニ同社ニ於テ獲得シタルヲ以テ其權利ノ行使ニ就テハ日、米、極東共和國三國ノ協定ニ俟タザルベカラズ故ニ然ルベク盡力ヲ賴ム旨ヲ申入レ來レリ

然ルニ右申出ハ當初ト根本的ニ相違ヲ來セルガ故ニ遂ニ鈴木側ニ於テハ之レ以上商談ヲ進ムル餘地ナシトシ交渉ヲ停止セリ本問題ノ由來ヲ案ズルニシンクレア石油會社ハ嘗テ人ヲ北樺太ニ

送リテ油田ヲ調査セシメタル事アリテ其有望ナルコトヲ知リ大正十年頃ヨリ北京ニ於テチタ政府代表ト折衝ヲ開始セルモノヽ如ク大正十一年一月七日ヲ以テ假契約ヲ締結シ同年五月チタ勞農兵會議ノ承認ヲ得タリ而シテ契約ノ内容ハ略次ノ如クナリト云フ

一、期　限　一九五八年一月七日迄

二、條　件　同會社ハ四十萬金留（二十萬弗）ノ費用ニテ一九二八年一月七日迄ニ現地ヲ踏査シ適宜一千平方露里（二八一、〇〇〇エーカー）ノ鑛區ヲ選定スベシ又一九二五年一月七日迄ニ現場ニ鑿井機械ヲ少クモ一箇据付ケ其後三箇年以内ニ更ニ一箇増設スベシ

三、保　證　先ヅ手附金十萬弗ヲ倫敦ロイド銀行ニ露國國立銀行勘定トシテ供託スベク右ニ對シ露國政府ハ年三分五厘ノ利子ヲ支拂ヒ元金ハ滿期ノ際償還ス右ノ外シ社ハ千九百二十四年一月七日迄ニ四十萬弗債券ヲ提供シ千九百二十八年一月七日右ニ代ヘ百五十萬弗ノ擔保付債券ヲ提供スルヲ要ス

四、納稅ノ義務　シ社ハ販賣開始後鑛區稅並鑛產稅トシテ年產額五百萬パーレルニ達セザルトキハ六分三厘（但シ販賣開始後又ハ一九二八年一月七日以後最低年額五萬弗ヲ納付ス）五百萬以上五千萬パーレル迄ハ一割三分七厘一毛ヲ納付スルヲ要ス又產出額確實トナリタル時ヨリ一エーカーニハ一割二分六厘七毛、夫レ以上一億パーレル迄付十九仙ノ賃借料ヲ納付スルヲ要ス

五、特　典　シ社ハ北樺太東海岸ニ於ケル二地ニ於テ築港ヲナスコトヲ得但シ右ノ港ハ露國ニ屬シ且其ノ支配ノ下ニ置ガルベシ

シ社ハ食料品、衣服ノ輸入稅ノ外一切ノ輸入稅並輸出稅ヲ免除セラルヽノミナラズ現行ノ證券印紙稅ノ外新稅ヲ課セラルヽ事ナシ

六、契約取消　露國政府ハ本契約締結後一箇年内ハ自由ニ解約スルコトヲ得其以後ニ於テ左記ノ場合ニ於テハ露國政府ハ電信通告ヲ以テ何時ニテモ本契約ヲ取消ス事ヲ得

甲、一九二七年一月七日迄ニ（紐育タイムスニ依レバ追加契約締結ノ日ヨリ五箇年内）米國ガ他國ト露國ノ領土保全若クハ主權ノ保全、若クハ主權ヲ侵害スベキ取極ヲ締結シ又ハ米國自身露國ニ對シ敵對行爲ニ出ヅル場合

乙、前記期間内ニ米國ガ露國ニ對シ法律上ノ承認ヲ與ヘザル場合

右取消ノ場合ニ於テ露國政府ハシ社ニ對シ法律上又ハ德義上何等ノ責ヲ負フコトナ

シンクレア會社北樺太ニ調査隊派遣計畫及之ニ對スル帝國ノ方針決ス（大正十二年四月）

シ但シ供託金ヲ返還シシ社所有財産及設備ハ露領樺太ヨリ之ヲ搬出スルコトヲ得

右ニ關シ米國政府側ノ言ニ依レバ本件ハ全然シ社ト極東共和國トノ交渉ニシテ國務省ノ關係スル處ニアラズ只時々通報ヲ受ケ居ルノミナリトノコトニシテ又本件ノ許與ハ決シテ排他的ノモノニアラズ北樺太ノ地理的關係ニ鑑ミシンクレア會社ハ日本政府又ハ日本當業者ニ對シ不公平ナル態度ニ出ヅルコトナカルベシトノコトナリ

然ルニ帝國政府ハ既ニ北樺太ニ軍事占領ヲ行ヒ何等權力ヲ有セザルチタ政府ガ同地ノ利權ヲ許スコトハ絶對ニ認メザル方針ニシテ右ノ次第ハ當時チタ政府ノ前身タル浦鹽政府ニモ通告シタル處ナルガ故ニ遂ニシンクレア會社側ノ提議ニ對シテ鈴木側ヲシテ拒絶セシメタリ其後右契約ハ大正十二年一月二十三日ニ至リ全露勞農政府ノ許容スル處トナリ一九二三年（大正十二年）八月二十日モスコーニ於テ調印ヲ了シ又前記手附金拾萬弗ハシ社ヨリ拂込マレタリト云フ

而シテシ社ハ右契約ニ基キ大正十二年夏期ヲ以テ先ヅ油田調査隊ヲ北樺太ニ派遣ノ計畫アル趣ナリシヲ以テ大正十二年四月閣議ヲ以テ右ニ對スル我方ノ態度ヲ決シタリ

大正十二年四月二十四日、閣議決定

一、米國シンクレア石油會社ハ勞農政府トノ北樺太油田開發契約ニ基キ今夏油田調査隊ヲ同地ニ派遣スベキヤニ傳ヘラルヽ處帝國ノ北樺太占領繼續中ハ同地域内ニ於テ一切他ノ權力ヲ認メザル結果右地域内ノ利權ニ關シシンクレア會社等ガ勞農政府ト締結シタル契約ハ我方ニ於テ之ヲ認ムルヲ得ザルコト今期議會ニ於テ屢々聲明セル通リナルヲ以テ今後シンクレア會社等ニ於テ調査隊又ハ調査員等ヲ北樺太ニ派遣セントスルガ如キ場合試掘等ヲ目的トスルモノニ對シテハ之ヲ拒絶スルコト可然單ニ視察ヲ目的トスルモノヽ入國モ出先官憲ヲシテ成ルベク之ヲ思ヒ止マラシムル樣力メシムベキモ先方ニシテ强テ之ヲ希望スル場合之ヲ禁ズルコトハ却テ我ニ不利ナル結果ヲ招來スベキ虞ナシトセザルニヨリ其許否ハ時ノ情勢ニヨリ帝國政府ニ於テ之ヲ決定スルコトヽスベク依テ右ノ場遭合ニ遇セバ出先公使館ヨリ請訓セシムルコト

二、帝國政府ハ本期議會ニ於テ累次前記ノ方針ヲ聲明シ來レル次第ナルヲ以テ此際重ネテ同趣旨ノステートメントヲナスコトハ其必要ナカルベキノミナラズ却テ面白カラザル影響ヲ與フルモノト思考セラルヽニ依リ其儘トスルモ今後本件展開ノ模樣ニ依リ機宜ノ措置

ヲ執ルコトヽスベク尚一方同方面ニ赴カントスル者ノ取扱ニ付在米大使竝在米各領事ニ對シ第一項ノ趣旨ヲ以テ訓電スルコトヽスベシ

（終）

（註）右閣議ニ基キ内田外務大臣ハ駐米埴原大使ニ訓電シ且同大使ヨリ在歐ノ各大使ニ參考轉電セシメタリ

シンクレア會社派遣員北樺太到着及之ガ處置（大正十三年）

然ルニ翌大正十三年二月七日**シンクレア**會社派遣ノ米人二名、露人通譯一名ノ一行ハ北樺太西岸**ポコビー**ニ到着セリ　就テ調査スルニ右ハ大正十二年八月**モスコー**ニ於テ**シンクレア**社ト勞農露國政府トノ間ニ締結セラレタル契約ニ基キ北樺太油田調査ヲ目的トシ十二年九月米國出發浦鹽、哈府、尼港等ヲ經テ氷上ヲ渉リ此地ニ來レルモノニシテ右目的ノタメ東海岸**チヤイオ**ニ至ランコトヲ希望セリ

而シテ其旅行券ニハ米國々務卿**ヒューズ**ノ署名ヲ以テ技術上ノ目的ナレバ世界到ル處旅行シ得ル旨ヲ記載シ之ニ紐育駐在日本總領事代理ノ奥書ヲ存シ尚ホ尼港官憲ノ發行セル北樺太旅行證明書ヲ所持セリ當時我派遣軍ノ外人取締規則ヨリシテハ自國官憲ノ發給スル旅行證明書及在外帝國領事ノ査證アルモノニ對シテ其入國ヲ差シ止メ難カリシヲ以テ鑛業取締令ニ據リ我占領以

シンクレアノ北樺太利權無效トナル（大正十四年三月）

前ヨリ繼續シアル鑛業權ハ之ヲ認メアルモ新ニ之ヲ開始スルハ許可セラレザルニ付新鑛業ヲ目的トスル入國ハ許可シガタキ旨ヲ諭シ彼等モ能ク之ヲ諒セリ是ニ於テ成ルベク速カニ北樺太ヲ退去セシムルノ方針ヲ以テ先方ノ希望ヲ容レ亞港經由仝地ヨリ特務艦大泊ニ便乘ヲ許シ小樽ニ上陸セシメタルガ彼等ハ此旅程中派遣軍及特務艦大泊ニ於テ受ケタル好遇ニ對シ深ク謝意ヲ表シテ去レリ

右**シンクレア**探險隊入國拒絶ノ件ニ付テハ當時米國新聞ニ報道セラレタリシガ我軍ノ處置ヲ寧ロ當然ナリトスル見解モアリシモノヽ如ク格別ノ問題ヲ起スニ至ラズシテ止ミタリ而シテ露國勞農政府ハ我ニ對シ、露國官憲ノ裏書アルニ拘ラズ何故ニ日本政府ハ露國主權ヲ無視シテシ社員ノ視察ヲ拒絶セルヤトノ意味ヲ以テ抗議シ我外務大臣ハ芳澤駐支公使ヲシテ**カラハン**ニ對シ右抗議ノ理由ナキコトヲ通告セシタル處**カラハン**ハ右ハ「露」シ契約ノ精神ヲ尊重シ露國側ノ責務ヲ遂行セルヲ證センガ爲ニナシタル迄ナリト回答セリト云フ

後尚勞農利權委員會ハ莫斯科縣裁判所ニ對シ北樺太ニ於ケル**シンクレア**石油會社ノ採掘權ヲ取消スタメ訴訟ヲ提起シ千九二十五年（大正十四年）三月二十四日本利權契約ヲ無効トストノ判決ヲ得タリ利權委員ハ**シンクレア**利權ト露國政府トノ關係ニ付左ノ說明ヲナセリ

昨年五月**シンクレア**會社ニ對シ不履行中ノ義務ヲ直ニ履行スル樣要求シ六ケ月間ニ之ヲ遂行セザレバ之ヲ裁判ニ附スベキコトヲ通告シタルニ拘ラズ同社ハ其後日露條約調印ノ最後ノ日迄義務履行ニツキ何等着手スル處ナカリキ而シテ同社ノ義務不履行ノ事實ハ昨年**シンクレア**會社代表ガ莫斯科ニ於テ最高利權委員會ニ提出セル聲明書中ニ於テモ之ヲ承認セリ從テ同社ガ今更日露條約ガ同社ノ北樺太利權ヲ侵害セリナト、云フハ當ラズ云々

島田ト大倉組ノ行動

第二節　島田元太郎及大倉組ノ行動

ニコライエフスク在留、島田元太郎ハ多年同方面ニ在テ貿易其他ノ事業ニ從事シ日露人間ニ聲望實力アリ豫テ北樺太資源ニ着目シ大正六年ノ頃ヨリ其店員、島田博茂等ヲシテ各地ヲ踏査セシメツヽアリタリト謂フ

大正七年十月、宮本機關中佐ノ**オハ**油田探險ニ依リ同油田ノ極テ有望ナルコトヲ知ルヤ深ク之ニ留意スルニ至レルモノヽ如ク我海軍當局モ同油田ガ內外人利權運動ノタメニ累セラルヽヲ不可トシ島田ニ對シテモ此旨ヲ諭シ愼重警戒セシムル處アリタリ

（註）宮本機關中佐ガ**オハ**探險後歸京仝方面ノ事情ヲ報告スルヤ海軍當局ハ北樺太利權運動ノ無統制ニ陷ランコトヲ憂ヘ不取敢仝官ノ名ヲ以テ島田ニ對シ次ノ通電報セリ

大倉組、島田等提携ス（大正七年）

大正七年十月十九日、岡田艦政局長ヨリ第三艦隊參謀長宛電

宮本機關中佐ノ名ニ於テ左ノ電**ニコラエフスク**島田ニ傳ヘラレタシ

樺太東海岸全部ノ石油採掘及**アレキサンドロスク**附近ノ石炭問題ニ關スル件委細復命シタルニ不日更ニ山口少將及小官貴地ニ出張ノ上重ネテ貴下ノ盡力ヲ煩ハシ過般ノ御意見通何レニモ有利ナル日露合同ノ事業等トシテ圓滿ナル根本的解決ヲ協議シ仝時ニ軍事上ノ便利ニモ資セラルヽコトヽナレリ就テハ夫迄ノ間ハ兩問題トモ貴下ニ於テ可然保留シ此際利權獲得ノ爲種々ナル條件ヲ以テ貴下ニ申込ム多數ノ者ニ對シテハ餘リ深入リセザル樣致サレタシ

此電報ハ嚴ニ秘密トシテ了解ノ上ハ其ノ旨通知ヲ乞フ

尙貴下ヨリ御話ノ技師モ仝行ノ見込ヲ以テ考中ナリ

（終）

此頃大倉組派遣員、高松義郎ハ尼港ニ至リ諸種利權獲得ニ關シ島田ニ提携ヲ申込ミタル趣ニテ結局同年十一月島田、高松ノ外露國人**コンスタンチン**、**アレクサンドロウイッチ**、**キム**（朝鮮人ニシテ露國ニ歸化セルモノ）ヲ加ヘ**サカレン**鑛業組合ナルモノヲ組織セリ本組合ハ同方面ニ

於ケル金鑛、其他鑛業、林業、製鹽等各種ノ事業ヲ目的トスルモノニシテ尼港ニ本店ヲ置キ資本金五十萬留（無限責任者**キム**五萬留、有限責任者、島田　二十萬留、高松　二十五萬留ノ割合）トセリ

次デ翌大正八年四月、島田及**キム**ハ東京ニ於テ大倉組ト協議シ利權獲得ヲ目的トスル合資會社設立ニ關シ契約セリ就中北樺太ノ石油利權ニ關シテハ若シ**ケ、ア、キム**ニ於テ其ノ利權ノ許可ヲ得ガタキ場合ニハ仝人ヲシテ豫テ油田、金鑛、探險許可證ヲ有スル露人**ジキスムンドイエロニモウィッチ、カイゼル**ト特種ノ契約ヲ結ビ其ノ權利ヲ繼承セシメ**キム**ハ之ヲ組合ニ提供スルコト等利權獲得手段ニ關スル協定ヲナセリ

斯テ**キム**ハ同年六月亞港ニ於テ右ノ**カイゼル**ト權利承繼ニ關スル契約ヲ締結セリ

當時大戰ノ影響ヲ受ケ尼港方面ニ於テハ石油ノ供給著シク缺乏シ露貨暴落ノ關係モ加ハリテ石油一箱三千留乃至四千留ニ達セリト謂フ從テ油田利權着目スルモノ少カラズ島田等ハ之等ノ情勢ニ鑑ミ速ニ**オハ**油田ノ利權ヲ獲得セント焦慮シ其ノ便法トシテ**サカレン**州自治會ヲ利用シ運動ノ末大正八年七月遂ニ同會々長**ア、ア、シヨウコウニコフ**ト覺書ヲ交換シ自治會ハ**オハ**官有油田（舊**ゾートフ**借區）ノ重油採取ヲ**オムスク**政府及浦鹽**ロザノフ**執政官ニ出願シ許可ヲ受ケ

島田等**オハ**油田ノ利權ヲ得ンガ爲露西亞側ニ策動ス（大正八年）

タル上ハ島田ハ自己ノ出資ヲ以テ之ガ採取精製ニ任ジ事業ノ純益ハ島田側、七、自治會側、三ノ割合ヲ以テ分配スベキ旨ノ協約ヲナセリ

又一方島田等ハ**キム**名義ヲ以テ北**サカレン**ニ於ケル經濟狀態研究ノ爲**オハ**ニ於ケル舊**ゾートフ**鑛區、官有建物使用ノ義ヲ**サカレン**島鑛務官**オリセフスキー**ニ出願シ大正八年九月之ヲ許可セラレタリ（後年島田ノ陳情ニ依レバ當時**オハ**油田ノ採油ヲモ默許セラレタリト謂フ）

同年十二月浦鹽政廳ハ**オハ**油田ヲ現狀ノ儘採油スルコトヲ州自治會ニ許可スルニ至リタルヲ以テ島田等ノ組合ハ前記協約ニ基キ愈々**オハ**油田ノ採油ヲ行フタメ**キム**ヲ現地ニ派スルト共ニ尼港ニ於テモ島田博茂等ヲシテ諸般ノ準備ヲ進メシメシガ翌九年五月尼港事變ノタメ之等物資ノ一切ヲ掠奪セラレシノミナラズ博茂等從業員ヲ夫ヒ茲ニ**オハ**油田ニ對スル彼等ノ計畫ハ致命的打擊ヲ受ケテ頓挫セリ

（註）後日島田ノ說明ニ依レバ當時仝人等ガ**オハ**油田利權獲得ノタメ州自治會ヲ利用スルノ件ニ付テハ豫メ石田尼港副領事トモ相談一決セル趣ナルガ大正八年九月下旬同副領事ヨリ內田外務大臣宛報告ニ依レバ領事ハ「州自治會ノ役員ガ殆ンド準過激派ニ屬スル實情ニ鑑ミ之ト協約ニ依リ將來永ク我事業ヲ繼續シ得ルヤ疑問ナルコト及北辰會トノ關係ヲ複

大倉組派遣員ランゲリ產油地踏査（大正八年）

雜ニシ其ノ結果ハ好マシカラザルベキコトニ付高松等ノ注意ヲ促シタルモ仝人等ハ一日モ早ク經營ヲ開始スルニアラザレバ從來ノ苦心モ水泡ニ歸スベシトテ自治會ト提携セントセルガ如シ云々」トアリ

又北樺太西海岸ランゲリ川筋ノ油田ニ關シテハ大正七年夏前記ノ島田博茂等初テ之ヲ發見シタルガ後島田元太郎ト大倉組高松等ノ組合成立シ翌大正八年夏、高松ハ技師、赤木敎憲、技手、吉永某等ヲ伴ヒキムト共ニ更ニ踏査ノ結果之ヲ有望ナリトシ直ニキムト特約アル前記カイゼル名義ヲ以テ亞港鑛務署ニ出願セルガ鑛務署ハ當時サカレン島ニ於ケル鑛業ノ私營ヲ禁止セラレアルノ故ヲ以テ之ヲ拒絕セリ

島田等オハ及ランゲリ鑛區ニ付軍政部ニ出願セルモ不許可（大正九年十一月）

後大正九年北樺太ガ我軍政下ニ置カルヽヤ同年十一月、島田、高松等ハ前記ノ關係ヲ陳情シオハニ於ケル採油、並ニランゲリ鑛區試掘ノ件ヲ軍政部ニ出願セシガ我軍事占領後ニ於ケル同地油田ノ開發ニ關シテハ別ニ記述スルガ如ク海軍ノ軍事調査トシテ現業ヲ北辰會ニ請負ハシムルコトヽシ又鑛業權整理ニ關シ方針ヲ決セラレタル折柄島田等ノ右出願モ許可ヲ得ルニ至ラズ且大倉組ハ既ニ海軍ノ指導ニ從ヒ前年來北辰會ニ參加セル等是等新事態ノ下ニ於テハ同人等ノサカレン鑛業組合モ其ノ存續ノ意義ヲ失ヒタルノミナラズ我北樺太事業ノ統制上却テ好マシカラ

ザルヤニ認メラレタリ

斯テ大正十年四月島田ハ大倉組ノ求ニ依リ上京シ大倉組ノ外北辰會ニ關係セル日本石油、寶田石油兩社ノ代表ト會見交渉ノ末同五月右關係者ノ仝意ニ依リサカレン鑛業組合ノ事業ハ海軍ヽ農商務ノ事業地調査終了迄延期スルコトヽナレリ

而シテ從來大倉組及島田、双方ヨリ支出セル費用及立替金ニ關シテハ尼港事件ニ際シ文書燒失シ其ノ精細不可能ノタメ全部ヲ打切リトシ島田ハ組合事業始末費用ノ内トシテ金二千圓ヲ受領セリ

斯ノ如クシテ北樺太利權ニ關スル島田ノ活動モ尼港事件ノ打擊ト情勢ノ一變トニ依リ空シク終了シ大倉組トノ提携モ失ハルヽニ至リシガ後大正十四年、日露條約成立スルヤ島田ハオハ油田ランゲリ油田ニ對スル自己ノ關係ニ付海軍ニ陳情シ後又露西亞側ト我石油當業者トノ間ニ利權契約締結セラレ新會社ノ設立セラルヽコトヽナルヤ大正十五年二月同人ハ東京ニ來リ自己ガオハ油田ノ先鞭者トシテ相當ノ補償ヲ受ケ度旨海軍大臣ニ陳情セリ海軍當局ハ往年同人活動時代ノ海軍省當局者タル元軍需局長山口海軍中將及元局員宮本海軍機關大佐等ノ所見ヲモ徵シ愼重審議ノ結果大正十五年三月海軍省ヨリ同人ニ對シ「北樺太ニ於ケル海軍ノ油田調査ニ功勞尠カ

島田ノ陳情（大正十五年二月）

ラズ依テ金參千圓ヲ贈與」セリ

當時本件詮議ノ趣旨ハ左ノ海軍大臣決裁ニ依リ明ナリ

（註）當時北樺太石油會社ノ設立ニ當リ島田ノ功勞ニ報ユルノ意味ヲ以テ同人ヲ同會社ニ參加セシムルコトニ付一應考慮セラレタルモ成立ニ至ラザリキ

島田元太郎ニ關スル件（大正一五、三、一八決裁）

島田元太郎請願ノ趣旨ハ同人ガ海軍及外務當局ノ命ヲ請ケ**オハ**油田利權獲得ヲ計畫シ其先鞭ヲツケタル功績ヲ考慮シ政府ガ北辰會ノ投資ニ對シナシタル補償ト同樣ノ意味ニ於テ自己ガ**オハ**油田開發ノ爲ニ露貨五十萬留ヲ投資シタル處尼港事件ニ際シ石油事業準備品全部烏有ニ歸シタルヲ以テ右投資額並ニ同時ニ虐殺セラレタル四名ノ從業員ニ對スル補償金ヲ請求セントスルニ在ルモノヽ如シ

然レドモ北辰會ノ投資ト島田ノ投資トハ全然其意味ヲ異ニシ前者ハ政府ガ閣議ノ決定ヲ經テ實行セシメタルモノニ係リ同會ガ多年北樺太油田開發ノタメニ努力シ其功績アルハ政府並ニ國民ノ認知スル處ナリ然ルニ島田ハ官邊ノ命ニ依リ之ヲ實行セリト自稱シ居レリト雖モ其ノ實行ニ關シテハ何等政府ノ公認セザル處ナルト且ツ具体的開發事業ヲ實施セルモノニアラザルガ故ニ

本人ノ請願ノ趣旨ハ妥當ト認メ難シ又尼港事件ニ基ク損害ニ關シテハ海軍トシテハ補償救恤等ノ責務ナク之ニ對シ何等考慮ヲ要セザルモノト認ム

然レドモ大正六、七年以來海軍省ガ北樺太油田ニ着目シ本邦人ヲシテ之ガ利權獲得ニ參加セシムルノ計畫ヲ立テシ以來海軍當局ハ島田ヲ利用シ露人其他ノ利權涉獵者ノ割込ヲ抑フルニ努メ同人モ亦露人間ノ信望及財力ヲ利用シ大ニ活躍セル處アリシハ事實ニシテ其隱レタル功績ハ相當認メザルベカラザルモノト認ム

從テ前項ノ趣旨ニ基キ此際同人ノ功勞ニ報ユル爲臨時軍事殘務費油田調査費雜給及雜費ヲ以テ三千圓程度ノ賞與金ヲ贈與スルコトヽシテ可然哉

右仰高裁

（終）

第三節　宮本機關中佐オハ探險手記

（註）宮本機關中佐ノ**オハ**探險ニ付テハ當時口頭報告ノミニ止メラレタリ今回本編纂ニ際シ全官ヨリ其ノ手記ヲ得タルニ付參考トシテ爰ニ掲記スルモノトナリ

大正七年十月予自ラ**オハ**ノ極北油田ヲ視察シ歸ツテ其ノ**アスフアルト**ノ大露面ヤ溢出油ノマダ

新シイ溜リヤ瀝青池ノコトナドヲ半分專問的ニ半分珍奇ノ紀行談的ニ加藤海軍大臣（友三郎）
栃内次官（曾次郎）ニ復命シタコト久原ノ幹部ニ說明シタコトガ一轉機ヲ劃シテ從來ノ晦澁ナ
進行振リニ一道ノ光明ト希望ヲ與ヘタ感ノシタコトハ自ラ深ク滿足スル所デアル　ソレハ大正
七年三月ニ既ニ北樺太油田調査ノ決裁ヲ經テキタガ北樺太ニ軍人ノ立入ルコトガ不穩當デアル
當時ノ事情ト農商務省方面ノ技師ニモ都合ガアツテ着手サレズニキタノデアツタガ適々仝年九
月ニ尼港ノ石田領事カラ**ニコライエウフク**對岸ノ**ワツセ**カラ石油ノ出ル露頭ヲ發見シタ旨ノ電
報ガアツタノデ、山口少將ハ直チニ調査ヲ立案セラレ仝月十一日ニ決裁ニナルト仝時ニ農商務省
技師山根新次氏仝技手中川藤太氏ヲ海軍省囑託トシテ予ト仝行シテ尼港ニ出張スルコトヽナツ
タ予ハ出發前井上地質調査所長ヲ訪ネ仝地ノ地層ニツキ概見ヲ糺スト火山性ノモノデ石油ニ縁
ノ薄イコトヲ知ツタガ出來レバ此機ニ北樺太ニ入リタイト勇心勃々トシテ九月十八日舞鶴カラ
特務艦勞山ニ便乘シテ二十二日**デカストリ**灣ニ着、有馬第三艦隊長官ニ伺候シ參某長齊藤大佐
（後ノ軍令部次長、七五郎氏）ニ北樺太北端方面迄驅逐艦便乘ノ能否ヲ聞合セタガ當時幕僚ノ
意見デハ既ニ減水期ニ入リ海圖モ不確實ナ北水道カラ更ニ陸灣ニ近ヅクナドハ一寸因難ナ事
情デアルコトヲ聽キヤヽ失望シタガ兎ニ角第一ノ目的タル**ワツセ**露面ヲ探索スベク敷設船葦

崎丸ニ便上シテ二十四日、尼市着田所水雷戰隊司令官石田領事、島田元太郎、森段三等ノ諸氏
ヲ訪ネ森段三氏ノ好意デ其位置ヲ知リ二十六日、七日ノ兩日山根技師、中川技手ト共ニ**ワツセ**
ヲ視察シタガ第四紀ノ褐炭層ガ若干アル他ニ何物モナカツタ　二十八日予ハ山根技師ニ北樺太
渡航ノ希望ヲ打明ケタルニ仝氏ハ訓令外デアル未知ノ天險地ニ入ルコトハ希望セザル旨デアル
カラ亞港附近ノ炭山ヲ調査スベク予ニ先發シテ亞港ニ中川氏ト共ニ派スルコトニシ予ハ單身北
樺太ニ入ルベク通譯ノ雇入レヲ當時尼港島田鐵工所長ヲシテキタ前記森段三氏ニ依頼セシニ森
氏モ初メカラ北樺太ノ富源ヲ耳ニシナガラ在露十七年ノ今日迄探險ノ機ナカリシコトヲ遺感ニ
思ヒキタリシコトヽテ自ラ通譯兼案内人タランコトヲ申シ出タリ蓋シ森氏モ利權熱ノ余リ自己
利益ノ打算モアルコトハ承知ノ前ニテ内々渡航船ヲ物色セシメシ處當時船長**カールパ、イワノ
ウキッチチジョース**ナル露人ガ舊**アムール**河用砲艦ニテ一見我國ノ舊三等艇ノ如キ發動艇ヲ所
有スルコトヲ知リ仝人ニ交渉セシニ石油燃料品切レニテ繫船數旬ノコト故石油サヘアラバ直チ
ニ出動スベシトノコトナリ依テ二十八日直チニ田所司令官（廣海）ニ内意ヲ打明ケ尼市**チヌイラ
フ**方面海軍無線電信隊ノ越年用トシテ虎ノ兒トセル發動機燃料油（輕油）約二十箱ヲ讓リ受ケ
タ當時尼港ニハ石油一罐百留、揮發油一罐貳百留、（留ハ我五十錢相當値ノトキ）ナリシタメ

船長ハ欣喜雀躍シテ直チニ運轉手ヤラ機關手ヤラヲ呼集シ九月二十九日拂曉前記森ノ外ニ**イワシ、ニコーノフ**ナル露人ヲ伴ヒ發動艇子**プル**號ニテ北水道ニ向ツタ九月末ノ天候ハ全地ハ多クハ低氣壓ニ見舞ハレ一日トシテ靜穩ノ日ナク水雷戰隊モ數日ナラズシテ引揚グルコト故十月四五日頃ニハ是非共尼港ニ歸着スル樣ニスベシト司令官ヨリノ注意モアツタ　予ハ日本ノ某會社ノ技師ナリト振レ込ミ背廣服ニテ出懸ケ森ニモ此旨ヲ含メタリ風濤ト戰ツテ直路北樺太西岸**バイカル**灣ニ向ケ午後三時**ゾートスキー**、**バンカー**、**リューリ**第一號漁場ノ附近**リーブヌイ**ニ假泊セシモ天候險惡ニシテ再三錨地ヲ變更シ暗夜辛フジテ**バイカル**灣入口ニ辿リ付キ蘇生ノ思ヒヲシタ　三十日午前五時半**マスカレウオ**着**ギリヤーク**土人部落ニテ苦力三名ヲ傭入レタ此ノ土人ハ全ク露國化シテ**ハバロウスク**ニテ洗禮ヲ受ケタト云フ

シマゲン、**インノケンチ**、**オースポン**及**ヱナユワイヌ**ト呼ブ三人ニテ張目シテイツ北樺太ガ日本ニ占領セラレシヤトノ奇問ヲ發シヌ予等ハ酒精、煙草、藥品ナド彼等ノ歡ビソウナ品物ヲ澤山ニ用意シ來タノデコレヲ分配シ同部落ノ跛者ノ小女ニ銀貨ヲ惠ミシニ其ノ恩ニ感テ彼等ハ三日間ノ探險ニモ極メテ忠實ニ立働キタリ

三十日午前ハ灣內ノ滿潮ヲ待チ午后灣澳ノ**ギリヤーク**土人冬營部落タル**ニレオ**着、土人小屋ニ一泊シヌ　コノトキ不潔ト南京蟲ニ襲ハレテ旅馴レタ予等モ安眠出來ズ發動艇ノ補助帆ヲ持チ來リテ之ヲ屋內ニ擴ゲ其ノ四隅高ク天井裏ニ吊リ恰モ蚊帳ヲ逆ニシタルガ如キ大**ハンモック**ヲ作ツテ漸ク眠リニツキタリ爾後コノ帆ハ**オハ**旅行中一人ノ土人常ニ擔イデ從フ事ニセリ十月一日早朝**ニレオ**發一週間分ノ糧食ト夜間ノ防寒具、小銃、背銃等ノ武器ヲ土人ニ擔ハシ粗林、密林、或ハ**ツンドラ**地帶、道トイフ程ノ道ナキ部ヲ辿リ大要磁石ヲ按シテ東海岸ニ向フ**ツンドラ**地帶約二里ヲ徒步シタトキハ長靴ヲ一々引キ拔ク丈ケノ力無キ迄ニ疲勞シ切リ度々休息シテヤツト高地ニ出ヅレバ更ニ**バイカル**ノ北ニ今一ツノ灣アリ**ザレオ**、**ポーモリ**ナリ海圖ニハナケレド露國發行ノ地圖ニハ現ハレ居レリ以テ明治三十八年發行ノ我海圖樺太北部ト稱スルモノガ如何ニ不精確　漏ナルモノカヲ相見スルニ足ル、コレデハ有馬長官ノ云ハレル如ク責任アル艦船ヲ樺太北部ニヤルコトハ出來ヌ筈ナリ　更ニコレハ後日ノ談ナレド大正八年測量圖ノ出來タアトニテ前記圖、二六二號ノ乙ト對照スルト元ノ海圖ノ通リ船ニ乘レバ陸地ニ航路ヲ求メルコトヽナルヲ知レリ　我邦人ノ北守南進論ニ　ラルヽコト夥シキヲ今ハジメテ知ツタ偖一行ハ疲勞シ切ツテ一日ノ夕方**オハ**、**ゾートフ**舊鑛業地ニ着イタ予ハ其晩星アカリニ溪谷ノ水ノ音ト山ノ谿間ニ一大河原ガ横タハツテ居ルノデサテハ大ナル河原ニ近ク出タモノト思ヒ其ノ儘眠リヲ求

メテ翌日朝早ク洗面スベク谿谷ヲ下リテ前日ノ夕大ナル河原ト思ヒシ一面ノ平野ハスベテ瀝青堆積地ナルコトヲ見テ一驚ヲ喫シタリ　森氏ハ手ノ舞ヒ足ノ踏ム處ヲ知ラズトイフ調子ニテ早速ニ用意ノ　ヲ以テ附近ノ立木ヲ削リ露文ニテ（**アムール**）河岸（**ニコライエウスク**）市森段三（千九百十八年十月二日）發見　ト色鉛筆ニテ書キツケ予ノ制止モ聽カバコソ**ニコーノフ**トト二人シテ所謂**キル**池ノ周リヲ馳ケメグリ生木ヲ削リテハ「森」ト記シ以テ利權獲得ノ表示トナスナリトイフソノ氣相カヘテ騷グヲ見テ滑稽モ度ガ過ギテ悲哀ヲ感ゼヌヲ得ナカツタ　所デ始メテ**キル**ノ實物ヲ見溢出油ノ溜リヲ見タル予モ感慨無量ニテ昨日ノ疲勞ヲ忽チニ霧消シ半日ヲ費シテ附近ノ踏査ニ努メ露人**ゾートフ**ノ舊井ガ今尚噴油セル狀ヲ目擊シ**ヌトオ**ノ**キル**トハ異ナル生氣アル直下ノ油層ノ破斷面カラ逆出スルモノナルコトヲ直覺セリ、二日夜ハ更ニ**オハ**ニ宿泊シ三日**ウルクト**湖ヲ視察シ**エハビ**道ヲ迂回シテ密林中ヲ木ヲ伐リ伐リ舊**オハ**、**バイカル**道ニ合シタ一昨日來ノ旅行中我一行以外一人ノ土人ニモ一人ノ露人ニモ會セズ熊ニ會スル數次ナリシモ曾テ人影ヲ見ザリシハミナラズ二日**オハ**附近踏査中モ武器糧食ナドヲ木立ノ枝ニ結ビ置キタル儘半日ヲ過ギテ再ビ來ルモ何等ノ異狀ナキ等全ク太古神代ノ斧鉞入ラザルノ靈域ニアル感セリ日中ハ十月初ノコトヽテ旅中身体汗スルモ夜間ハ内地十一月末ノ氣溫ナリキ三日夕**ニレ**

オ着、再ビ不潔ナル土人小屋ノ厄介トナリ四日拂曉發、灣内淺クシテ屢々舟行ニ困難ヲ感ジ午后漸ク**バイカル**灣ヲ出デ荒天ノ北海ヲ横斷ス　天候先日ヨリモ更ニ險惡ニシテ森**ニーコーフ**等一同船暉ノ爲起ツ能ハズ船長、運轉手、亦舵機ニ身体ヲ繫シテ顚落ヲ支フル程ナリキ爲メニ尼市ニ歸着セシハ仝日夜十時ニシテ鬼氣身ニ迫ルノ感アリタリ此ノ一行油田實況ノ撮影ト多數ノ原油見本ヲ携ヘ歸リ森ノ利權渴仰カラ終ニ尼港方面ニ駐屯シキタリシ日本事業家ノ探知スルトコロトナリ大倉鑛業會社ノ如キ尼港、島田元太郎ト協同シ**オハ**採油會社ヲ創設スルニ至ツタ

（下略）